



祭り当日はお揃いのエプロンで集合。右から津野寿美子さん、森本文さん、宮川園子さん、斎藤鈴代さん、今西美穂さん、池本富喜さん、ブースのお手伝いの女性（東久美さんが来れなかったのでピンチヒッター）

標高は約120m。区画整理された田んぼが川沿いにきれいに並ぶ



ドブロク村から

反アベノミクスレポート

高知県三原村・三原どぶろく組合

海外の大企業を誘致したわけでも、莫大な補助金が下りたわけでもないのに、人を惹きつける元気な村がある。2004年にドブロク特区に認定された、人口約1700人の三原村だ。米と農家の自給力で生まれたドブロクが、村に小さな経済をコツコツ積み上げてきた。ドブロクを売り出して9年の、村のいまをのぞいてみた。

文 編集部

写真 大村嘉正



7軒がそれぞれやる

高知の南西端、幡多地域の台地に位置する三原村は、昼夜の気温差があり、昔から米がおいしいと評判の土地だ。村内には地元土建会社や電気部品工場などがいくつもあるが、大手スーパーもホテルもない。「企業栄えれば国栄える」のアベノミクスが思い描く姿とは縁遠い村だ。

そんな村のドブロクが、年間

2700万円を売り上げる。つくっているのは7軒の稲作農家で、

それぞれが自宅に酒蔵をもつ。7銘柄の年間生産量を合わせると1万8000ℓほどにもなる。

訪れたのは、年に1度の「どぶろく・農林文化祭」の前日。毎年4000人が押し掛ける村の一大イベントだ。今回は初めて、ドブロク飲み放題・地元料理食べ放題の「夜の部」を開催することと、チケット（3500円）は5

00人分がすでに完売。

四国で一番早くドブロク特区に手を挙げたのが三原村だった。

「三原は電車も通らんし見るところもなくて人も来ん。でも自分たちには米がある。村の特産品を考えたたら、昔盛んだったドブロクを復活させるしかない。農家仲間も商工会メンバーもそう考えて、特区申請を役場に働きかけた」と三原どぶろく組合の初代組合長の池本公二さんはいう。



ドブロク特区とは2003年に始まった構造改革特区の一つ。酒税法ではドブロクは年間6ℓ以上つくらないと製造免許は受けられないが、特区内では農家が自分の米を使って少量から製造・販売できる。食堂や民宿を営むことが大前提で、15万円かけて酒造免許をとり、酒蔵を建てたり、10万円ほどするアルコール濃度測定器も必須など、完全自由な酒づくりとはいかないが、条件をクリアすれば農家が自分の技術で醸せる。

「なにしろ大手を振ってドブロクをつくれるのがうれしかった。百姓の当然の権利やけん」

どうせやるなら個人じゃなくて村全体で盛り上げたいと、志を同じくした池本さんから3人のメンバーで「三原どぶろく組合」を結成。その後2年間で4軒が加わった。

初めはみんなで一つのドブロクをつくらうとする話もあったが、そもそもは自分の家の米を活かしたい気持ちがある。7軒それぞれで仕込み、販売は独立採算制とした。

一人勝ちを目指さない

組合としては資材を共同で仕入れたり、村外のイベントに毎月1